

わたしの

「源氏物語」

大和和紀

いつのまにか桜も散って、今はもう新緑の季節になろうとしている。

つい先日、いきなり結婚式などしてしまったので、仕事の合間を家事にとられる日々が続いている。教会での結婚の誓いの言葉、……生涯貞節を誓いますか、のくどりで世の男たちは一瞬自信を失うそうだが、源氏物語はその恋多き男の物語であり、不倫の恋も数々とりあげられている。

源氏が父帝の妃藤壺に恋するのが物語の幕開けだったし、朧月夜は兄弟の寵妃、夕顔は友人頭の中将のもと妻、空蟬もまた人妻であった。

それらの恋を盗むときの源氏の、ふだん優等生然とした目が、すこしワルくなり、きゆうに男のセクシーさを増すのが、描いていてワクワクするところだった。

恋してはならぬ恋、禁じられた恋、罪の恋。さまざまな恋のパターンのなかで、不倫の恋はもっとも人間の弱さや強さ、いわば人間くささを浮き彫りにしてしまう重さを持っている。

数々の不倫を犯してきた源氏にもやがて重いお返しが待っている。女三の宮の事件である。息子のように目をかけていた柏木と、愛する紫の上を悲しませてまでも正妻として大切にしていた女三の宮の不倫。

裏切られ、生涯二枚目の誇りを踏みしられ、愛を自覚させられ、その怒りと憎しみを、どうにもできぬ自分を知らされた源氏の失意を描くのが

は、なんら共通点を持たないわたしには苦心の連続だった。

ともあれ、源氏にイヤミを言われ、ひと目にらまれただけで柏木は病気になる、良心の苛責に耐えきれず死んでしまう。女三の宮もまた、生まれたい子を捨てて出家。

あまりにも悲しい結末に、読者は、そこまで二人を追いやった源氏に恐れさえ感じてしまう。じつさい、年をとった源氏が若い恋人たちに嫉妬してイジめるのはひどい、愛してもいない女三の宮なら柏木に譲って、紫の上を幸せにして、などとお便りをいただいたりもした。このあたりで源氏を嫌いになった読者も多かったようだ。

しかしなぜ恋人たちはあんな情けない結果に自らを追い込んでしまったのか。

柏木はもともと出世のために女三の宮との結婚を望んでいたが、三の宮を惜しんだ父朱雀院は、その代わりに女二の宮を柏木に与える。思慮深い青年のはずの柏木はこのことにこだわらなくなり、恋の魔性(あきま)……では、黒猫として具象化してみた)に取りつかれたようにズルズルと深みにはまってしまう。

女三の宮にしても柏木を本気で愛していたわけではない。彼女が愛していたのはあくまで自分自身であって、自分さえ大切に守られていれば、夫

が年をとっていきなり、自分以上に紫の上を愛していきなりとかまわなかったのだ。むしろ、その安楽な場から自分を愛の戦場へひきだそうとする柏木を、その愛の熱を恐れていたとさえいえるだろう。そして、その恐れに凍りついたまま……流されてしまったのだ。

もしも二人が、より強く愛しあい、なにかもなげうって恋を実らせたいと思っていれば、この恋はちがう展開をみせたかもしれない。

柏木が地位も将来も捨て、女三の宮が柏木を心から愛したら、源氏はあんなに不倫の先輩として二人の恋を見て見ぬふりをしたかもしれない。

だが源氏は二人を許さなかった。源氏が藤壺を愛したときの捨て身の覚

悟が柏木には欠けていたから。地位も名誉も捨て、魂が地獄に落ちようという悔いぬ恋となったとき、不倫の恋は罪ではなく至上の愛に変わることを、二人が知らないことが許せなかったのだ。

つまり「源氏物語」は、はんばな恋は断じて許さない美しくも辛口な恋物語なのである。

「最後に愛は勝つ」が信条の少女漫画のわたしとしては「うーん、キビシすぎる」と思ってしまうのだが、読者のかたはいかがでしょうか。



平成三年 初夏 東京にて 大和和紀